

ZENBI

全国美術館会議機関誌

January 2019 [Vol.15]

Jan. 2019

美術品管理システム Artize MA

NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた 収蔵作品（資料）管理のための高機能データベース

「Artize MA（アルタイズ・エム・エー）」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。



豊富な基本機能と柔軟なカスタマイズ

あらゆる美術館・博物館の作品管理業務への対応を考え、豊富な機能を基本パッケージに盛り込みました。個別ニーズに合わせたカスタマイズにも柔軟に対応でき、短期間でスピーディなシステム導入が可能です。

ユーザーごとのアクセス権限を詳細に設定

ユーザー管理画面から利用者のアクセス権限や作品情報の公開・非公開が設定可能。貴重な情報のセキュリティ保持も万全です。

高精細な作品画像を専用ビューアで閲覧

「Artize MA」に登録された作品画像は、専用の高精細ビューアで見たい部分を自由に拡大表示できます。

来館者用端末やインターネットを通じて

広く収蔵作品を公開

非常に簡単な操作で、「Artize MA」に登録されている作品情報を、セキュリティを保ちつつネットワークを経由して公開することができます（インターネット情報発信機能を標準搭載、Web サーバーはオプション）。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

京都本社（担当：和田） 604-8551 京都市中京区壬生花井町 3 075(823)5151

大阪支社（担当：石濱） 541-0047 大阪市中央区淡路町 1-7-3 日土地堺筋ビル 06(6232)2714



CONTENTS

ブロック報告

2	[北海道] アートギャラリー北海道—美術館相互のつながりをめざして 苫名 真
4	[東北] 地域に寄り添うということ 萱岡雅光
6	[関東] 地域に、あるいは、地域から目を注ぐことなど 鳴原 悠
8	[東京] 写真映像の展示を考える 田坂博子
10	[北信越] 節目の年の美術館 中川美彩緒
12	[東海] 休館中の四方山話 北谷正雄
14	[近畿] 近代を見る眼 鈴木慈子
16	[中国] この地域のリニューアル情報のまとめ 谷藤史彦
18	[四国] 分野横断の可能性 一柳友子
20	[九州] 古代から現代へ—多彩な美術展から 山西健夫

部会報告

22	保存研究部会 相澤邦彦
23	教育普及研究部会 遊免寛子
24	情報・資料研究部会 川口雅子
25	小規模館研究部会 神谷剛生
26	ホームページ部会 宮武 弘
27	機関誌部会 尾崎信一郎
28	美術館運営制度研究部会 貝塚 健
29	地域美術研究部会 藤崎 綾

賛助会員各社 30

事務局から 31

編集後記 33

投稿要領 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 34

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.15 2019年1月31日発行 ©全国美術館会議

【編集】全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎 青山杏子

【発行者】全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

【デザイン】宮谷一孝 【印刷】日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

アートギャラリー北海道 —美術館相互のつながりをめざして

苦名 真(とまな まこと・北海道立近代美術館)



本題に入る前に、先日北海道を襲った地震についてご報告したい。9月6日の未明、突然の激しい揺れに見舞われた。あわてて勤務する美術館に駆け付けたが、幸い作品には異状なし。ただ停電が発生し、空調は停止していた。朝になってもテレビは見られず、状況はラジオを通して聞くばかり。予定されていた作品の貸出しは延期し、次回展の作品借用に出張していたスタッフとやりとりをして、現地からの搬送もとりやめた。当初通じていた電話もつながりなくなる。それでもこの日の午後には美術館一帯の停電が解消し、空調も回復。温湿度の変動も許容範囲内におさまった。しかし、翌日も余震が続き、公共交通機関が麻痺していたため館は臨時休館。次回展の開催日程の変更についての協議や連絡調整、他館の被害状況などの情報収集に追われた。

本稿を執筆しているのは、地震から1ヶ月が経った10月上旬。北海道博物館協会の調査によると、情報の寄せられた136館のうち、施設に何らかの被害のあった館が33館、資料に被害のあった館が20館にのぼっている。当館では2週遅れたものの、予定していた展覧会は無事開幕、業務も正常に戻ったが、地震の影響は思わぬ所に飛び火した。来年の作品借用を依頼していた海外の所蔵館が貸与に難色を示し始めたのだ。近いうちに担当者が現地に赴き、状況を説明することになっている。

さて、2018年は本道が北海道と命名されてからちょうど150年の節目にあたる。官民挙げてさまざまな記念事業が行われているが、その一環として企

画されたのが「アートギャラリー北海道」という構想。これは北海道内の美術館が連携し、「美術館を行き交う人々があふれ、北海道全体がアートの舞台となる」ことをめざすものである。東北6県に新潟・富山県を合わせたほどの広大な面積を持つ北海道には数多くの美術館がある。道市町村立からNPO、個人運営の館まで大小さまざまだが、その数ざっと100館。これまで学芸員の集まり(北海道美術館学芸員研究協議会)はあったが、美術館相互を結ぶネットワークはなかった。参加館は現在72館にのぼっている。

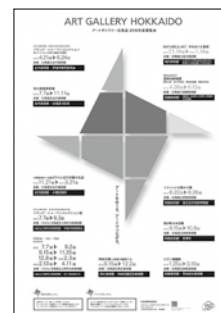
具体的な取り組みとしては、①利用促進(マップの作成やスタンプラリー、観覧料の相互割引など)、②施設や所蔵作品の相互紹介、③若手作家の育成が挙げられる。②については、道立各館で相次いで連携展が開かれている。伊達市に寄託されている「フランク・シャーマンコレクション」を北海道立近代美術館と北海道立三好太郎美術館で紹介したのをはじめ、小樽芸術村、エコミュージアムおさしまセンター・砂澤ビッキ記念館：アトリエ3モア(音威子府村)、神田日勝記念美術館(鹿追町)、荒井記念美術館(岩内町)などの所蔵品を道立各美術館で展示することになっている。③については、三好太郎美術館が北海道ゆかりの若い作家を紹介するシリーズ展「mima-no-me #みまのめ」をスタートさせた。31歳で急逝するまでの短い活動期間に若々しくエネルギッシュな画業を展開した三好太郎にちなんで企画で、年間4期に分け、現在VOL.2を開催中である。

2017年から2018年にかけて道内では、マスコミと共催した大規模な海外作家展(「ゴッホ展」)や著名美術館(大原美術館、ブリヂストン美術館、東京富士美術館)の名品展、あるいはデジタル技術を駆使した体感型の展覧会(「魔法の美術館」展)などが多くの来館者を集めた。また2017年の秋、ニトリが運営する小樽芸術村がオープン。2018年8月にはその一角にルイス・C・ティファニステンドグラスギャラリーが新たに開設されるなど、華やかな話題に事欠かなかった。

その影に隠れがちだったが、道内で活動する中堅作家にスポットを当てた二つの個展が好企画だった。北海道立釧路芸術館で開催された「八戸耀生写真展」(4月14日～6月13日)は自ら熱気球を操り独自の視点から撮影を続けている写真家の、市立小樽美術館の「命の脈動 武石英孝展」(3月10日～5月31日)は祖父や娘など身近な人物を長

期間にわたり描き続ける油彩画家のそれぞれの足跡を初めて本格的に紹介するもの。こうした展覧会を実施することは、代行者を求め得ない、地域の美術館が担うべき重要な責務であろう。

このようにして取りあげられた作家がやがて道外でも紹介され、多くの人の目に触れるようになるのを見るのはうれしいことである。2017年は彫刻家砂澤ビッキの回顧展が道外では初めて神奈川県立近代美術館で開かれたが、2018年は「木田金次郎展」が府中市美術館で開催された(7月21日～9月2日、その後札幌のJRタワー・プラニスホール、ニセコ町の有島記念館、岩内町の木田金次郎美術館を巡回)。府中での来館者は9,470人。多くの報道機関で紹介され、700部ほど用意した図録も完売するほどの好評だったという。アートギャラリー北海道のネットワークをいかし、第2、第3の砂澤ビッキ、木田金次郎を見逃さないよう網を張っていきたい。



北海道立釧路芸術館「八戸耀生 写真展」会場風景

「アートギャラリー北海道」
ロゴマークとポスター

地域に寄り添うということ

萱岡雅光（かやおか まさみつ・リアス・アーク美術館）

私が勤務するリアス・アーク美術館は東北・北海道の現代美術作品を中心に、地域の民俗資料、東日本大震災に関する資料についても研究・展示している。私はその中で民俗分野を担当しており、美術分野に関する専門知識は無い。そこで本稿では東北地域における美術の動向というよりは、あくまで私個人が気になった今年度上半期（以下今期）の美術、博物館の活動について紹介し考えたことを述べたい。

2018年は明治元年から150年に当たり、国が推進したこともあって歴史分野の企画展示は明治に関連づけたものが多く開催された印象を受ける。会津戦争の主戦場となった福島県の福島県立博物館では、新潟県立歴史博物館・仙台市博物館との連携企画だが「戊辰戦争150年」（9月1日～10月14日）が開催された。えさし郷土文化館の「もののふたちの近代史―幕末・明治の諸相と文化―」展（8月4日～11月4日）では戊辰戦争出兵の記録、明治時代の軍服や武器など、多彩な資料が展示された。武士から軍人の時代への変化がよく分かり、明治という時代あるいは近現代について改めて考える好機となった。

次に美術分野では宮城県仙台市在住の作家、是恒さくらの活動を紹介したい。是恒は様々な国と地域の人と鯨にまつわる物語を刺繍の形で表現し、さらにその作品を基にリトルプレスを発行する活動を行っている。是恒の作品は、地域に生きる人々に真摯に向き合いその声に耳を傾ける丹念な

フィールドワークによって紡ぎ出されている。私が個人的に興味を惹かれたのが、宮城県石巻市の GALVANIZE gallery の「山形藝術界隈展〇七 是恒さくら・久松知子 二人展」（7月6日～8月19日）において展示された、是恒の作品《藝術の旗》である。是恒は芸術を日常の延長にあるものと考え、地域の日常をリサーチする。水産業が盛んな石巻市で活動をするに当たり、是恒はそこで生きている人々にとっての日常の延長にある芸術の在り方として、漁師が船に立てる大漁旗に着目した。大漁旗は祭礼や船の新造、出漁時などに船を飾る旗で、三陸地域の地元の人達には「フライキ」とも呼ばれる。その図柄や色使いは大胆で、一枚一枚の意匠の意図を尋ねると、依頼主と作り手双方の美意識が感じられ、一種の「芸術品」にも見える。だが地域の人々はそれを「芸術品」とは思っていない。彼らの文化ではそれは「芸術品」ではなく「民俗資料」でもなく、あくまで「フライキ」なのである。是恒は石巻で古くから大漁旗を染めてきた染工場の山田夫妻と対話を重ね《藝術の旗》を共同制作し、制作過程の写真資料とともに石巻のギャラリーで展示した。作家が地域の文化的コンテキストの中に一度身を置いて寄り添い、作品を生み出して視覚化し共有するというこの過程は、文化人類学・民俗学の研究方法にも似ている。

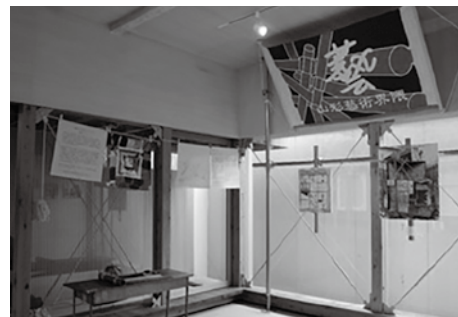
ところで今期は時代の節目に当たると同時に忘れてはならない記憶が刻まれた半年間でもあった。大阪の地震、西日本の豪雨、台風21号、北海道地

震…。今期は自然災害の連続だった。各地で「被災地」と呼ばれる場所が増え続けているこの状況で、災害を対岸の火事と言っていられる博物館施設はもはや無いと言っているのではないだろうか。そこで本稿の最後に小規模ではあるが災害と向き合っている博物館施設の、特別な企画展ではなく日常的な活動の事例を敢えて紹介したい。岩手県の岩泉町歴史民俗資料館は廃校を利用し、山村生活の民俗資料を中心に、地質、動植物、考古の資料を展示している。また東日本大震災や昭和、明治の津波災害に関する展示もしている。岩泉町は2016年8月の台風10号による豪雨によって大きな被害を受けた。学芸員を含む資料館スタッフ達が聞き書き調査のノウハウを活かし台風10号にまつわる語りの収集と整理に当たっており、近々報告書を発行する予定であるという。資料館は直接的には被災していないが、地域で被害を受けた資料の洗浄作業、台風の影響で解体、移築する家から寄せられ

る寄贈資料の収集などを行っている。また SNS を毎週更新して活動や寄贈資料の情報を発信している。民俗資料を紹介する投稿記事に対して閲覧者が資料情報を提供したり、補足の情報をコメントしたりしている場面も見られる。この資料館の開館日は週1回で年間の来館者数も多くはないものの、関係者の地道な活動と工夫により地域にとって無くてはならない存在になっている。

自然災害に直面した博物館施設はその施設の規模の大小を問わず災害と向き合うこととなる。外部からの支援が終了した後も、メディアに「被災地」と呼ばれなくなった後も、災害後の日常を地域と共に歩み続けていかねばならない。そのとき、地域における博物館の真価が問われることになるだろう。

博物館施設の存在意義が問われる昨今、博物館が本当に果たすべきことは、地域に寄り添った地道な活動を積み重ねていくことなのではないだろうか。



GALVANIZE Gallery「山形藝術界隈展〇七 是恒さくら・久松知子 二人展」会場風景（是恒さくら 提供）



洗浄・乾燥中の被災文書類（岩泉町歴史民俗資料館 提供）

地域に、あるいは、 地域から目を注ぐことなど

嶋原 悠（しぎはら はるか・埼玉県立近代美術館）



筆者の勤務する埼玉県立近代美術館は、2018年で開館36年目を迎えた。36年間、あるいはそれ以前から積み重ねられてきた美術館活動、とりわけ調査研究をどのように継承していくかということは、個人的な関心事の一つになっている。例えば、キャビネットには、コレクションや収蔵作家に関する情報はもちろん、展覧会にあたっての調査や、随時行われている県内外での調査、情報収集によって集められた作品データや写真、文献、所蔵者の情報などが保管されている。膨大な資料群だが、収蔵作家や埼玉の美術の特集展示を準備するときなど調査研究のヒントを探すべく、これらのファイルを引っ張り出すことも少なくない、頼もしい存在だ。先輩学芸員によって蓄積されてきたこうした情報を受け継ぐとともに、わずかながらでも成果が生まれれば、その情報を追加したり更新したりすることを目指している。学芸員が世代交代している中、美術館に蓄積された情報を受け継ぎつつ、新たな視点を加えて地域の美術や文化をみつめること、あるいは地域に立つて美術を見ることは地方美術館の重要な使命の一つであり、同時に醍醐味でもあると感じている。

さて、上半期を思い起こすだけでも相次いだ災害に加えて社会状況の変化が美術館や文化のあり様に揺さぶりをかけるできごとが続いた。ただ、これらに目配りした時評を綴るのは筆者の手に余る。ここでは、上述したような個人的な問題意識を踏まえて、コレクションや地域の力を掘り起こした活動を中心に関東ブロックの約半年間を振り返りたい。

関東ブロックでは、地域の作家や文化に光を当てるとともに、地域から美術、文化を見つめる活動が各館のたゆまぬ努力によって続けられている。すべてを見ることはかなわなかったが、印象的だった展示を紹介したい。

再評価著しい画家の、出身地での待望の回顧展となった川越市立美術館の「生誕140年 小村雪岱」展（1月20日～3月11日）では、多分野で才能を発揮した雪岱の幅広い仕事を堪能することができた。雪岱の画業は2009年に開催された埼玉県立近代美術館での展覧会を機に近年各地で紹介され知られるようになったが、本展では特に「雪岱調」と呼ばれた唯一無二のスタイルの挿絵が生まれた過程が作品資料と解説によって丁寧にたどられていて、これまでも川越の美術文化を丹念に掘り起こしてきた同美術館らしい企画だと感じた。ちなみに、泉鏡花記念館（石川県金沢市）の『「日本橋」一鏡花、雪岱、千章館一」展（5月25日～9月9日）でも泉鏡花の小説などを手がけた出版社と鏡花、雪岱との交流を示す新出の作品資料が紹介されたといい、川越の展示とあわせ、雪岱とその周辺についてはなお検証の可能性があることをうかがわせる。

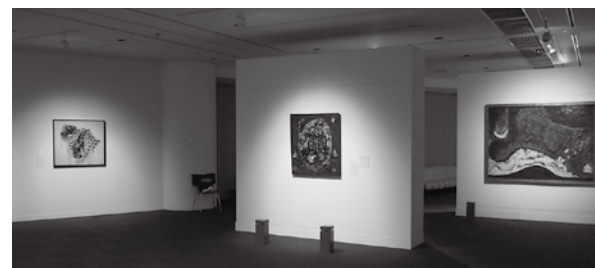
開館5周年を迎えたアーツ前橋は、前橋の芸術文化活動の拠点となるとともに、地域に縁を持つ作家や文化を検証する展覧会を意欲的に手がけている。「横堀角次郎と仲間たち」展（3月17日～5月29日）は、大正から昭和戦後にかけて活動した前橋ゆかりの洋画家の足跡をたどる回顧展だった。群

馬県内外から集められた多数の横堀の作品と関連作家の作品によって、いかにも劉生に感化されていた草土社時代から、のびやかで温かみのある画風を確立した春陽会の時代、そして晩年まで、地元との結びつきを大切にしながら画業を全うした画家の「飾り気のない」個性が見えて面白かった。1984年の群馬県立近代美術館での展覧会以来の美術館での大規模な回顧展ということだったが、群馬県内で長年継続されてきた調査研究が新しい美術館にも引き継がれている成果でもあるといえるだろう。

もう一つ、太田市美術館・図書館の「ことばをながめる、ことばとあるく——詩と歌のある風景」展（8月7日～10月21日）を紹介したい。この展覧会では、3組9名の、詩人や歌人と、グラフィックデザイナーや美術家、イラストレーターとの共同で生まれた作品が展開された。美術館と図書館の複合施設として2017年開館した同館が、『本』と『美術』の架橋を目指して企画した本展は、美術館で詩や文学を取り上げたこれまでの展示の中でも特に新鮮な印象を残し、詩や短歌という「ことば」を「読む」とき、私たちはそれが印刷されたり書かれたりして「視覚化されたもの」を「眺めて」いるのだということに改めて気づかされた。加えて印象深かったのは展示構成と空間の取り合わせだ。1階中央の展示室から、スロープをあがって2階へ、さらに最上階

の小さな展示室へと展示を見て歩く途中に、人々が本を手にとったりくつろいだりしている図書館空間を何度も目にしたり横切ったりするのは、展覧会の構成とも相まって、ことばのある空間に身を置いているようで何とも心地よい鑑賞経験だった。

ところで、ご承知の通り、近年、開館後数十年経過した美術館が大規模改修に入り、長期休館中に収蔵作品を巡回させる「コレクション展」や、他館に作品の長期借用を行い貸出先の館の調査研究や展示に活用するケースが多く見られるようになった。最近の関東ブロックでも、埼玉県立近代美術館や横須賀美術館など4つの美術館を巡回した「モダンアート再訪—ダリ、ウォーホルから草間彌生まで 福岡市美術館コレクション展」、川越市立美術館と群馬県立館林美術館で内容を変えて開催された板橋区立美術館の日本近代洋画のコレクション展などを見ることができ、それぞれの館の個性的で厚みのあるコレクションに驚かされた。付け加えておきたいのは、これらの展覧会が、貸出元の所蔵館と開催館の学芸員によって練り上げられ企画性を含んだ内容となっていた点である。所蔵作品の調査研究の蓄積と、所蔵館とは別の視点からの作品の捉え直しとが組み合わせられて新鮮な文脈が生まれていたことはとても刺激的で、コレクションの豊かな可能性と広がりを感じさせるものだったように思う。



埼玉県立近代美術館
「モダンアート再訪—ダリ、ウォーホルから草間彌生まで 福岡市美術館コレクション展」会場風景

写真映像の展示を考える

田坂博子 (たさか ひろこ・東京都写真美術館)



携帯電話やスマートフォンなどのパーソナル機器の飛躍的な普及によって、写真や映像は、多くの人々にとって日常的なメディアとなっている。私の勤務する東京都写真美術館が毎年2月に開催する恵比寿映像祭は、2018年で10回目を迎えた。この10年で映像作品の表現も、メディアの進化にともない多様化しており、写真映像の作品に限らず、展覧会のなかで、記録写真や記録映像を扱う美術館や博物館も増えてきた。もはや目新しいメディアではなくっているからこそ、写真や映像の表現性が改めて問い直されている。ここでは、本年春から秋にかけて東京を中心にした展覧会の動向を、主に写真や映像を扱うメディアに関連して考えてみたい。

2018年は、明治維新150周年や1968年から50周年を記念する展覧会が全国で多く開催されている。1968年は、世界各地で暴動や大規模デモが起こり、社会的変革への意識が高まった年であり、同時期の芸術に注目する展覧会やイベントが国内外で企画されている。千葉市美術館「1968年 激動の時代の芸術」展(9月19日～11月11日)のように、60年代、70年代の日本の前衛芸術を社会的、政治的背景とともに紹介する展示も、ここ数年で多く目にするようになった。写真や映像が記録としてのみならず、当時の社会、政治を反映する作品や活動として生みだされていることに、国際的な関心が高まっていることの一端とも言えるだろう。練馬区立美術館で開催された「戦後美術の現在形 池田龍雄展—楯門幻想」(4月26日～6月

17日)では、特攻隊員として敗戦を迎え、国家権力に翻弄されながら、戦後、文学、演劇、映像とジャンル横断的に繰り広げられる戦後美術のなかで、多彩な芸術家や美術批評家と交流し、ルポルタージュ絵画、前衛芸術、宇宙の成り立ちをテーマとした絵画など時代とともに作風を展開してきた作家の活動を俯瞰できる貴重な機会となった。渋谷区立松濤美術館で開催された「涯テノ詩聲 詩人 吉増剛造」展(8月11日～9月24日)では、詩人・吉増が、写真や映像、現代美術の領域の差異なく、詩の表現を拡張しながら、活動を続けている軌跡を確認することができた。最新のパフォーマンス映像は、吉増の旺盛な活動の臨場感を伝えていた。

ここ数年、吉増剛造展のような、美術家以外の個展へ関心が高まっており、当然のことながら、この場合パフォーマンス、写真、映像、資料などが不可欠になる。ただ、その領域横断性を美術館の展示として、どのように扱うかについては、まだ多くの課題が残されているように思う。この意味で、東京国立近代美術館で開催された「ゴードン・マッタークラーク」展(6月19日～9月17日)は、1970年代のニューヨークで活躍し35歳の若さで夭折した作家の活動を、彫刻、映像、写真、ドローイング、関連資料などをとおして、美術館空間に再構築しようとする試みという点で示唆的だった。展覧会では、マッタークラークが近代都市や近代芸術へ向けていた批評的な方法論を、現代に

おいていかに引き受けていくかという応答として、「Playground」というコンセプトを立ち上げ、展示空間をストリートのような場へと変容させる挑戦が見受けられたが、他方で、美術館自体が、近代的制度の枠組みから容易に逸脱できない以上、反芸術的方法論を枠組みでみせることには、若干違和感も感じた。ただこのような矛盾をどのように引き受けて展示していくか、また、記録としての役割をもつ写真や映像表現を、どのように作品として扱っていくかは、美術館の今日的課題でもあり、そのことを改めて考える機会となった。

最後に、この時期にアジアにフォーカスした展覧会が多く開催されたことに触れたい。特に「MAM プロジェクト025: アビチャップン・ウィーラセタクン+久門剛史」展(森美術館 4月25日～9月17日)、「台湾写真表現の今〈Inside / Outside〉」展

(東京藝術大学大学美術館陳列館 9月14日～9月29日)、「アジアにめざめたら: アートが変わる、世界が変わる 1960-1990年代」展(東京国立近代美術館 10月10日～12月24日)などの展覧会のなかで、写真、映像作品が多く紹介されている。また東京都写真美術館で開催された「愛について アジアン・コンテンポラリー」展(10月2日～11月25日)では、セクシュアリティ、ジェンダーのあり方に焦点をあて、韓国、在日コリアン、台湾、中国、シンガポール、日本の6人の女性作家の写真映像作品を紹介した。アジア、国家という枠組みだけで作品を語ることは乱暴なことかもしれない。しかし、アジアの多様性を相対的に考えていく機会として、個々の作品を学ぶことには大きな可能性があるだろう。とりわけ、写真や映像において、その本格的な検証はまだ始まったばかりである。



東京都写真美術館 「愛について アジアン・コンテンポラリー」展
チェン・ズ《蜜蜂 #065-01》《蜜蜂》より、2010年 作家蔵 ©Chen Zhe

節目の年の美術館

中川美彩緒 (なかがわ みさお・富山県水墨美術館)



「平成」という時代もいよいよ終わろうとしている。元号が変わるとなると何やら一時代が終わるような気持ちになるから不思議なものである。昨年は、日本が近代国家へ歩み出した明治元年から150年を迎え、国を挙げて節目の年ともされ、その歩みを振り返り、当時の意気込みを伝える催事が全国で展開されている。各県それぞれに郷土の近代史が様々な角度から検証されたが、福井県では「幕末明治福井150年博」として県内全域の35施設で事業が展開され、美術の分野では福井県立美術館において「幕末明治のアートシーン～岡倉天心など福井ゆかりの作家を通して～」展(9月22日～11月1日)が開催された。幕末から明治に至る福井の美術界を、歴史画家・島田墨仙を中心に紹介する序章にはじまり、近代日本の東西画壇を牽引した指導者、岡倉天心と幸野楳嶺の系譜をたどり、さらに海外展開の道を拓いた美術商・岡島辰五郎の業績をあわせ紹介することで、日本全体の当時の美術界の様相が見える展覧会となった。収蔵作品主体で低予算と聞いたが、長年の明確な収集方針と数多い収蔵作品が生きた展覧会と言えるだろう。

石川県立美術館では、「若冲と光瑠～伊藤若冲とその画業に魅せられた石崎光瑠の世界」展(6月23日～7月22日)が華々しく開催された。江戸時代中期の京都の絵師、伊藤若冲への興味と人気は依然高く多角的に紹介され続けている。本展では、今から100年も前にその若冲に魅せられた

画家、石崎光瑠(富山県福光町出身、金沢で山本光一、京都で竹内栖鳳に師事)を併せ、両画家の花鳥画を一堂に紹介している。若冲の高い知名度に誘われて訪れた観覧者にとって、光瑠の絢爛たる花鳥画は驚きだったようだ。石崎光瑠については、2017年春、没後70年を機に富山県水墨美術館でも取り上げており、両展あわせて再評価の機会となった。

現代美術では、金沢21世紀美術館において「起点としての80年代」展(7月7日～10月21日)が開催された。80年代といえば美術館乱立と言われた時代と重なり、個人的には自分が美術館勤務を始めたのがこの頃だったこともあって、当時、ニュー・ウェイブと呼ばれた作品群に再会し、この間の社会(＝美術)の変化に隔世の感がした。

全国的に施設改修にともなう長期休館が多いなか、北信越ブロックでも新潟県立近代美術館、小林古径記念美術館、長野県信濃美術館 東山魁夷館などが休館中である。それぞれに大規模な改修の後にはより魅力的な展示が期待されるだろうから、慌ただしい工事と同時進行する学芸諸氏の仕事は大変である。だが、こうした長期休館の際には代表的な収蔵作品の貸出が行われるのも常であり、東京で10年ぶり、京都で30年ぶりとなる大回顧展「生誕110年 東山魁夷展」巡回が実現の運びとなり話題を集めた。

続いて、富山県の動向にふれたい。2017年春の新築移転、夏の全面開館と、幾度もこのコー

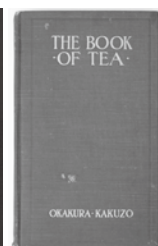
ナーで話題となっている富山県美術館は、デザイン関係の大型展二つが開催された。一つはNHK Eテレの番組コンセプトを体験の場へと発展させた「デザインあ in Toyama」展(3月21日～5月20日)、もう一つは前身の富山県立近代美術館時代から引き継ぎ12回目となるポスターの国際公募展「世界ポスタートリエンナーレトヤマ2018」(8月11日～10月8日)である。また、大きな展示空間を存分に生かした現代作家の展覧会も2本。高野山金剛峯寺に奉納される44面の襖絵の完成記念としての「千住博展」(6月9日～7月29日)、動物をモチーフとするユーモラスな木彫作品が人気の「三沢厚彦 ANIMALS IN TOYAMA」展(10月20日～12月25日)である。どちらも、活躍目覚ましい実力作家が渾身の最新作を発表する場として世間の期待も大きく、またそれに応える会場であった。なお、富山市中心部では、近年、新たに個性的な美術館の開館が相次ぎ、同館とあわせて美術館めぐりを楽しむファンが増え

ている。中でも富山市ガラス美術館(2015年開館)では、2018年秋から国際公募「富山ガラス大賞展」(9月15日～11月25日)をスタートさせた。

最後に筆者の勤務する富山県水墨美術館の話題を少々お許しいただきたい。2018年初めには、明治・大正期の高評価にもかかわらずその画業の全体像をみる機会がなかった画家・尾竹竹坡の代表作を紹介する初めての回顧展「生誕140年 尾竹竹坡展」(2月16日～3月25日)を開催した。また、今春には「愉しきかな！人生 老当益壮(老いて益々壮)の画人たち」(碧南市藤井達吉現代美術館との共同企画。当館会期は2019年1月11日～2月17日)を開催予定である。90歳を過ぎてなお旺盛に新たな絵画世界を求め続けた14人の画家たちを取り上げ、その作品から元気をもらおうというもの。さて、高齢化社会における美術館の社会貢献(?)となり得るかどうか。ぜひご高覧いただきたい。



福井県立美術館
「幕末明治のアートシーン」より
山田鬼斎「驚」1895年
福井県立美術館蔵



福井県立美術館
「幕末明治のアートシーン」より
岡倉天心「茶の本」
(ニューヨーク初版本) 1906年
福井県立美術館蔵



富山県美術館「三沢厚彦 ANIMALS IN TOYAMA」展 会場風景

休館中の四方山話

北谷正雄（きたたに まさお・豊田市美術館）



私が勤務する美術館の話から始めて恐縮だが、豊田市美術館は2018年7月17日から2019年5月31日までの1年弱の期間、改修工事のため休館中である。東海ブロックでは、同じ愛知県内の愛知県美術館が2017年11月20日から2019年3月31日まで休館中で、また、岐阜県でも岐阜県美術館が2018年11月4日から2019年11月2日まで休館の予定である。さらに、静岡県では、静岡県立美術館の本館と浜松市美術館が昨年度から改修工事を実施し、今年度に入り、浜松市美術館が4月14日に、静岡県立美術館が7月14日にそれぞれリニューアル・オープンした。1980年代から90年代にかけては、都道府県立そして市町村立と全国的にも数多の美術館が開館したが、その時期に建設された建物が20年、30年の年月を経て、ほとんどすべての館が、多かれ少なかれ設備の更新、経年により劣化した建築の修繕などの対処をしなければならない時期に差し掛かっているのだろう。東海ブロックにも、そういった状況に置かれた館が多数存在している。

文化財である美術品を収蔵し、展示する美術館という施設では適切な保存環境の維持が重要で、そのためには温度や湿度の調整を行う空調設備の24時間運転が欠かせない。改修工事のほとんどが設備の老朽化に伴う空調機器の更新のためであることは、美術館に勤める方々であれば真っ先に頭に浮かぶことだろう。また、最近の改修工事の目的の一つには、照明のLED化も挙げ

られる。LED照明はハロゲン電球に比べて消費電力が少なく、長寿命であるという省エネの観点からのみならず、美術品の鑑賞の上で非常に重要な色温度の設定も建物の環境に合わせることが比較的容易であるため、最近では多くの館が積極的に導入し始めている。当館も今回の改修工事において照明のLED化を行うことになっている。最近のLED照明は、弱点とされていた演色性も改善されてきており、美術館照明としても十分な性能を備えてきている。

ところで、豊田市美術館の今回の改修工事の目的の一つに天井の落下防止対策がある。おそらく、この数年の間に改修工事を行ったほとんどの館が同様の対策を実施したことだろう。東日本大震災では、多くの施設で天井が落下し、人的、物的の両面で少なからぬ被害が生じた。これを受けて2013年に建築基準法施行令の一部が改正され、一定の高さ、面積を超える天井については耐震のために新しい基準を満たさなければならなくなった。南海トラフ地震の想定被害域に含まれるこの地域美術館にとっては喫緊の課題でもある。この数十年の間に必ずやってくるであろう大地震から、人命はもちろん貴重な文化財である美術品を守るためにも、地震に対する備えは強調すぎることはないだろう。

さらに、最近では想定外の豪雨による災害も珍しいことではなくなってきた。実際、昨夏も台風やそれに刺激された前線によってもたらされた豪

雨が日本各地を襲い、大きな被害を引き起こした。ここ東海ブロックにおいても台風21号による大雨の影響で、企画展を会期中で終了して臨時休館し、補修工事を余儀なくされた館があった。幸い美術品に対する被害はなかったようだが、豪雨による漏水を招かぬよう、建物の防水の点検は日々の重要なメンテナンス項目として意識せねばならない。折しも、今年度の東海三県博物館協会研究交流会のテーマの一つは「ミュージアムレスキュー」であった。そこでは、7月豪雨で被害のあった岐阜県関市で、被災住民たちのアルバムや写真の洗浄ボランティアの取り組み事例などが報告された。災害発生時における支援活動の実施要領やネットワークづくりも、美術館に求められる重要な課題であることが改めて認識される。

長々と改修工事に触れながら、現在の美術館の状況を記述してしまったが、2018年度前半の東海ブロックのトピックとして大きな出来事は、名古屋ボストン美術館の閉館だろう。米国のボストン美術館の姉妹館として1999年に開館して以来20年、60余りの展覧会を開催してきたが、10月8日、最後の展覧会「ハピネス～明日の幸せを求めて」展（7月24日～10月8日）の会期

末をもって閉館した。地元財界が主導し、愛知県と名古屋市が支援して設立された財団が運営し、ボストン美術館が所蔵する優れたコレクションを独自のテーマ設定のもとに紹介する展覧会を中心に活動を積み重ねてきたが、一定の役割を終えたということか。ところで、今年度の前半では名古屋市美術館で「モネ それからの100年」展（4月25日～7月1日）、「至上の印象派展 ビュールレ・コレクション」（7月28日～9月24日）が開催され、それぞれ前者が15万人弱、後者が21万人強の入場者を記録している。どちらも印象派の巨匠を中心に据えた展覧会で、相変わらずの根強い印象派人気を示している。とくに前者は、モネに焦点を当てつつも、彼が後の世代の作家たちに与えた影響の大きさを検証する好企画で、出品作の多くは現代美術である。ただ、この展覧会を見た知人の親が漏らした感想は「モネの作品を見に行ったのに、余計なのが多くて肝心のモネが見づらかった」というものだったらしい。もしかしたら、この感想は多くの人の声を代弁しているのかもしれない。こういった状況と名古屋ボストン美術館を閉館に至らしめた遠因との間には、通底する何かがあるような気がしてしまう。



名古屋市美術館 「モネ それからの100年」展 会場風景

近代を見る眼

鈴木慈子 (すずき よしこ・兵庫県立美術館)



学芸員として初めて担当した展覧会のサブタイトルが「永遠の近代」であった。以来「近代」とは何か、折に触れて考えている。

和歌山県立近代美術館で開かれた「和歌山ー日本 和歌山を見つめ、日本の美術、そして近代美術館を見つめる」展(9月8日～10月20日)では、兵庫県立近代美術館の外壁にあった「近代」という文字が展示室に掲げられ、文字通り、近代への意識を喚起した。主に所蔵品によって構成されていたが、和歌山市内の寺院・寂光院の調査など、地元に残る文化財に関わる活動も取り上げ、「近代美術館」の果たすべき役割を示す展示であった。

近代のはじまりをどこに設定するかは、議論の分かれるところであろうが、明治初年とするならば、2018年はそれから150年。実際、「明治150年」をうたった企画も多い。京都国立近代美術館の「明治150年展 明治の日本画と工芸」(3月20日～5月20日)は、同館の所蔵品と京都市美術館、清水三年坂美術館など京都市内から集められた品々が多く、時代だけでなく地域性をも感じさせた。また博覧会の雰囲気を感じられるような柄物の絨毯を敷くなど、ディスプレイに工夫が凝らされていた。エッフェル塔が単なる鉄塔ではなくレースのような意匠があるのと同様、明治の日本が受容した19世紀の西洋文化には、装飾が欠かせない。同館で続いて開かれた「生誕150年 横山大観展」(6月8日～7月22日)では、画業をたどるための章立てに「『明治』の大観」「『大正』の大観」というふうに元号を用い、

それが作風の変化に見事に合致していた。京都府京都文化博物館の「華ひらく皇室文化展 明治150年記念 明治宮廷を彩る技と美」(10月2日～11月25日)は全国巡回展だが、旧日本銀行京都支店を別館にもつ同館にふさわしい展示といえよう。

上にあげた展覧会が、日本画や工芸品をメインとしているのに対し、奈良県立美術館の「明治150年記念企画展 美の新風ー奈良と洋画ー」(7月21日～9月17日)は「洋画」を切り口にしている。古都に吹いた近代の風というべきか、濃厚な油絵具の質感を堪能できる空間であった。美術教育に焦点をあて、奈良教育大学で教鞭をとった画家なども含めており、地域の洋画について、さまざまな観点から丁寧に紹介されていた。

近代を再考するきっかけは、明治という時代に限らない。たとえば奈良国立博物館の「糸のみほとけー国宝 綴織當麻曼荼羅と繡仏ー」展(7月14日～8月26日)は、特製ケースのおかげで、角度によって表情を変える糸の一本一本、種々のステッチを、間近に観察できた。手間をかけて縫い、織られた仏教美術の数々は、手工芸を下位に置きがちな近代的価値観を覆す。

もう一つ、古い時代のものを。19世紀末から20世紀にかけて高麗の王陵や遺跡が発掘され、高麗青磁が次々に見つかった。幻のやきものは、いわば近代に「再発見」されたのであり、20世紀前半には朝鮮半島で再現品の製造が試みられた。大阪市立東洋陶磁美術館「高麗青磁ーヒスイのきらめき」展

(9月1日～11月25日)では、これまで高麗の時代の作と考えられていた作品のいくつかが「再現品」と考えられるとして、最新の研究成果を展示に組み込んだ。具体的に一つあげれば、同館所蔵の《青磁象嵌菊牡丹文瓜形水注》がそれに当たり、木箱の蓋裏に「京城 李王家美術工場造」というシールがみえるという。近代をめぐるトピックへの入り口が、ここにもある。

最後に、紙の資料が重要な位置を占めていた展覧会三つを挙げておこう。国立民族学博物館の「太陽の塔からみんぱくへー70年万博収集資料」展(3月8日～5月29日)では、「万博資料収集団」が集めた圧倒的な数の資料に加え、写真や書簡等も豊富であった。岡本太郎が掲げた、仮面や神像を中心に据える収集方針は、人類学や考古学の視点に基づくというよりは、岡本太郎を貫くモダニズムを反映しているように思われた。京都工芸繊維大

学美術工芸資料館の「記録された日本美術史 相見香雨、田中一松、土居次義の調査ノート展」(6月25日～8月11日)。土居次義のノートは、2013年に京都国立博物館で開催された「狩野山楽・山雪」展に出品されていたのをよく覚えているが、こうして並べると、記録の仕方は三者三様。大阪府立江之子島文化芸術創造センター「enoco」の『プレスアルト』誌と戦後関西の広告展(10月2日～10月13日)。『プレスアルト』は1937年に京都で創刊された広告誌で、包装紙などの実物を雑誌に綴じ込んで頒布したユニークなもの。大阪新美術館建設準備室(本展会期後、名称が「大阪中之島美術館」に決定した)の所蔵品によって、関西の広告・デザインを再考する企画であった。アーカイブの重要性が叫ばれる昨今、これら紙資料が伝えるのは、そこに書かれている情報にとどまらず、近代を生きた先人たちの息吹なのだ。



大阪市立東洋陶磁美術館「高麗青磁ーヒスイのきらめき」展 会場風景

この地域のリニューアル情報のまとめ

谷藤史彦 (たにふじ ふみひこ・ふくやま美術館)

すこし私事になるが、現在広島市内に設立する私立美術館の準備に関わっているためか、21世紀に作るべき新しい美術館の形とはどういうものだろうかと日々考えている。一方で公立美術館にも片足を残しつつ改修に向けての話もあるため、新規のものと改修する場合との違いにも思いを巡らせてもいる。新規の場合の展示室や収蔵庫、美術品・図書資料のIOT管理、入場者管理のPOSシステム、スマートフォンを使った案内システムの導入などの在り方と、改修の場合の収蔵庫の増設、空調設備や内装の更新には確かにかなり開きがある。新時代に即応した設備にしようという考え方と、設備を復旧しようとする場合との違いであろう。20世紀末の状態に復旧するだけでは、この21世紀を乗り越えることはできないであろうと思うのだが、予算の確保が難しいのも現実であろう。

私も公立美術館に30年前から携わってきたが、その当時は全国的に閉館するところが多い時代だった。そして今まさにリニューアルの大きな波の中にある。中国ブロックの館も多間に漏れずで、各地からその計画が耳に入ってくる。ここでは、既に済ませた所も含めて、主な美術館の動きをレポートしてみたい。(正確を期すつもりであるが、計画変更の場合もあるのでご了承いただきたい。)

まず鳥取県の動き。美術館の機能を兼ねている鳥取県立博物館(1972年開館)が、分かれる形で新たに県立美術館として倉吉市に設立される計画が進んでいる(基本計画での試算額:建築工事費

77億円)。以前から収蔵庫の飽和状態が続いていたことから、博物館の3部門のうち美術部門が美術館として独立するというもの。民間業者と協力し合うPFI方式(神奈川県立近代美術館で行われた方式)を軸に、2020年頃から設計に入り、2024年の開館を目指すという。県民念願の美術館が実現することになるだろう。現在の博物館も改修されるという。

次に島根県立美術館(1999年開館)は20周年を前に2018年春に工事費約1億9千万円でリニューアルを終えている。ミュージアムショップの移転やキッズライブラリーの新設、隣接する宍道湖への出入口設置、照明のLED化など、宍道湖の眺望を生かした施設づくりを観光の面から進めたようだ。

山口県立美術館(1979年開館)が33年目の2012年にリニューアルを済ませている。エントランスの拡張や展示室照明設備の改修、展示室に24畳の畳敷きの鑑賞スペースを設け、雪舟の水墨画などを座って鑑賞できるようにした。また、下関市立美術館(1983年開館)では10年程前に空調設備の改修や屋外エレベーターの設置などの工事を行い、2018年は屋上の防水改修工事を行っている。

そして岡山県立美術館(1988年開館)が2018年に内外壁補修やエレベーター入替工事を終えている。2019年も続いて壁の補修、駐車場の電気設備の更新をする予定。また大原美術館で、1972

年開館の児島虎次郎記念館が2017年に閉館し、別の場所にある旧中国銀行倉敷本町出張所を改築して2020年にそこで再開する予定という。さらに、井原市立田中美術館(1969年開館、1983年増築)は、2018年に新館整備案が策定された。別館及び市民ギャラリーを取り壊して新館を計画し、本館と合わせて、2021年度に着工、2023年に開館する予定。新館は3,660㎡で、展示室、木彫体験コーナー、市民ギャラリーを設け、収蔵庫も拡大すること。

最後に広島県。広島市現代美術館(1989年開館)が大改修に向けて動いている。2017年に比治山公園「平和の丘」基本計画が発表され、域内の施設も順次整備されることに伴い、2018年に基本設計、2019年に実施設計、2020年の後期より改修工事に入り、配管や外壁修理、収蔵庫の増床、野外彫刻展示の変更などを行い、2022年のオープンを目指す。工事費は20億から25億円を見込んでいる。また、ひろしま美術館(1978年開館)では、2014年にカフェやトイレ、エレベーターの設置などの改修を済ませている。さらに東広島市立美術館(1979年開館)では、場所を市中心部に移して新築させる計画が進んでいる。現在の建物で2020年春まで活動するが、既に新築工事が始まり2019年に竣工、2020年秋のオープンを目指している。4階

建の延床面積3,500㎡で、工事費は21億円の予定という。

30周年記念で「岸田劉生一実在の神秘、その謎を追う」展(9月15日～11月4日)を開催した私の所属するふくやま美術館(1988年開館)は、2016年に屋上防水改修や空調施設の改修、2018年に館内茶室を改修しているが、本格的な改修はまだの状態。どこの美術館でも抱えているように、収蔵庫の飽和状態が続く、空調設備、照明設備、衛生設備などの老朽化に悩んでいる。改修に向けて市当局との協議を進め、休館を伴った大規模改修を模索しているところ。

全国各地でもリニューアルが進んでいるとことで、休館を利用した大々的なコレクション展が開催されている。2018年は、福岡市美術館のコレクション展(6月2日～8月26日)が広島市現代美術館で、ブリヂストン美術館のコレクション展(10月13日～12月16日)がひろしま美術館で開催されたのが目についた。

改修時の休館期間というのは、日頃できなかつた事、美術品管理や図書管理のシステムの変更、入館者サービス向上の準備などにも手を出す絶好の機会となるだろう。世界の美術館のサービスのレベルが高くなる中で、日本の美術館がガラパゴス化していくことだけは避けたいものである。



ふくやま美術館「岸田劉生一実在の神秘、その謎を追う」展会場風景



井原市立田中美術館 新館の外観予想図(2023年開館予定)

分野横断の可能性

一柳友子 (いちやなぎともこ・香川県立ミュージアム)



私の勤務する香川県立ミュージアムは、2018 年で開館 10 周年を迎える。はじめ 1999 年に香川県歴史博物館としてスタートした後、2008 年に香川県文化会館の美術部門が統合し、新たに香川県立ミュージアムとして開館したのだ。2018 年で就職 6 年目となる私にとって直接体験した出来事ではないものの、歴史と美術（加えるなら分館の瀬戸内海歴史民俗資料館が担う民俗）の多分野が共存する全国でも珍しい館の始まりだった。

2018 年は 10 周年記念の特別展「目からうろこのミュージアム！」(Ⅰ：8 月 4 日～9 月 24 日、Ⅱ：10 月 2 日～11 月 25 日)で当館の収蔵品が分野を超えてひとつの空間に展示された。Ⅰでは色と形によって、Ⅱでは暮らしの中の場面によってそれぞれ章分けされ、分野にこだわらずモノとして収蔵品を等しく見つめる機会となったのではと思っている。

最近のさまざまな展覧会を眺めていると分野横断的な企画が積極的に開催されている印象を持つ。もともと複合的な要素をもつ美術の背景にフォーカスするように、文学、歴史、あるいは工芸やデザインといったさまざまな要素が深く関わった展示は新鮮な視点で作品を捉える手法として広まり、最近の四国でも見出すことができる。

愛媛県美術館「坊っちゃん展—祖父江慎・梅佳代・浅田政志・三沢厚彦—」(6 月 30 日～9 月 2 日)は、道後温泉が舞台となった夏目漱石の小説『坊っちゃん』をテーマに「道後オンセナート 2018」の参加作家による写真、彫刻、書籍、関連資料を取り

上げた展覧会だ。4 名の作家それぞれの個性が互いに際立つ内容で、特に展覧会全体のディレクションを務めたブックデザイナーの祖父江慎による『坊っちゃん』の初版から現在に至るまでの出版履歴 112 年分を壁一面にひとつづきで展示したパートには圧倒された。各版の送り字やルビや字組の差違、表記のブレなどに赤字を入れて追っており、専門用語だらけで非常に細かい。出版関係者以外いったい誰が全部読むのか、と思いつつ私も全部読んでしまった。展示としては一つの小説の変化の歴史が長い壁面に可視化されていることが重要であるのだが、本好きなら案外読み込んでしまうことに新鮮な驚きがあり、従来なら文学館で開催されてきた内容であろう本展の開催は印象深かった。

続いて高知。高知県立美術館では「石川直樹 この星の光の地図を写す」展(4 月 7 日～6 月 10 日)が開館 25 周年記念展として開催された。石元泰博フォトセンターを有する同館において、山岳写真でよく知られる写真家の初の大規模個展だが、本展では山岳写真だけではなく旅先の人々や生活の様子、あるいは古代の壁画を撮影したシリーズが紹介された。風景としてだけではなく、文化人類学や民俗学などの視点から捉えることもできる題材であることが興味深く、石川の撮影はフィールドワークのように感じられる。

徳島県立近代美術館では「愛されて 40 年 『100 万回生きたねこ』佐野洋子の世界展」(7 月 14 日～9 月 2 日)、相生森林美術館では「さとうわきこ展」(7

月 14 日～9 月 9 日)と、昨夏の徳島は絵本原画展が続いた。絵本は言葉と絵が共存して初めて成立するものであり、挿絵や解説文のような主従関係ではないことが面白い分野である。また、大塚国際美術館では「ゴッホの 7 つのヒマワリ」が公開された(3 月 21 日～)。ゴッホが生涯で描いたとされる花瓶のヒマワリ全 7 点の原寸大陶板複製を一度に展示するものだが、中でも戦災で焼失した“幻のヒマワリ”を残された写真から再現していることに注目したい。美術分野においては著作権の問題もあり、複製には特に注意を払うことが多いが、この“幻のヒマワリ”複製は失われた作品を(材質は違えど)寸法・色彩をオリジナルに忠実に再現し、鑑賞にとどまらず研究面においても複製を貴重な参考資料とした。美術分野における複製の活用の好例として記憶に留めておきたい。

最後に香川をもう少し。2018 年に開館 30 周年を迎える高松市美術館では「高松コンテンポラリー

アート・アニュアル vol.7 『つながりかえる夏』展(7 月 27 日～9 月 2 日)、「音丸耕堂展—華麗なる彫漆世界」(9 月 15 日～10 月 21 日)が開催された。前者は同館が継続的に開催している現代美術展のシリーズであり、今回は藤浩志、千葉尚実、下道基行、山城大督の 4 名が取り上げられた。後者は香川漆芸の三技法の一つ「彫漆」で重要無形文化財保持者となった音丸耕堂の回顧展として初期から晩年までを俯瞰する貴重な機会となった。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では「荒井茂雄展 人生の詩」(4 月 14 日～7 月 1 日)、「猪熊弦一郎展 風景、顔」(7 月 14 日～9 月 30 日)が開催された。同館は施設改修のため 10 月から休館に入り、造形スタジオで子どもプログラム等の活動を積極的に行っている。「瀬戸内国際芸術祭」をこの夏に控えた今の時期に展示が見られないのは個人的にも淋しく、再開が待ち遠しい。



香川県ミュージアム「目からうろこのミュージアム！」Part Ⅱ 会場風景
デザイン作品と歴史・民俗資料が一体となった空間

古代から現代へー多彩な美術展から

山西健夫（やまにし たけお・鹿児島市立美術館）

2018年7月17日、熊本市在住の版画家・彫刻家の浜田知明氏が100歳の天寿を全うされた。日本のみならず世界的にも高い評価を得ている同氏の芸術については、ここで贅言を弄するまでもないだろう。

のっけから個人的な思い出話で恐縮だが、33年前の1986年7月、鹿児島市立美術館で浜田氏を講師に招いて銅版画実技講座を3日間にわたり実施した。筆者も16名の受講者に交じって浜田氏から直接指導を受けながら初めて銅版画を制作したのだが、今から振り返るととても貴重な体験であったと思う。講座終了後には、鹿児島市の尚古集成館をご案内した。その時、浜田氏は幕末にイギリスから舶載された紡績機械を長い時間をかけて飽かず眺めておられた。そして、正確ではないかもしれないが「なによりもこれは素晴らしいね」という意味の言葉をおっしゃった。数メートルはある黒光りのする大きな機械は、浜田氏の作品の持つ深い漆黒の魅力と通じるように思われた。

熊本県立美術館は、はやくから浜田氏の作品・資料を悉皆的に収集し、本館2階には浜田知明版画室を設けてその業績を顕彰している。このたびの訃報を受けて、「追悼・浜田知明展」が順次テーマ別に開催されており、その第1期（7月28日～9月24日）では同氏の名前を世に知らしめることとなった《初年兵哀歌》シリーズ全16点が展示された。熊本に行けばいつでも浜田氏に会うことが出来る。心からご冥福をお祈りしたい。

どんな人にも死は必ず訪れる。人は死んだらどうなるのだろうかと思うのはいつの世も変わらぬ人情というべきか。福岡市博物館の「浄土九州—九州の浄土教美術」展（9月15日～11月4日）は、古代から近世にいたるまで九州各地に伝わる浄土信仰に関わる絵画、彫刻などの優品、名品を一堂に集めた圧巻の特別展である。京都・禅林寺蔵（肥後萬善寺旧蔵）の《当麻曼陀羅》をはじめ、鎌倉時代に数多くの作例がある来迎図や三尺阿弥陀像のさまざまな作例、時代を超えて描かれてきた地獄・極楽の画像など多くの見どころがあった。九州のみならず浄土教美術の研究に大きな貢献をなす企画であると同時に、会場には佐賀県唐津市ゆかりの画家・中島潔氏による「《地獄心音図》CG版絵解き」が大画面に上映されていて、子供でもわかりやすいように地獄のイメージが説かれていたのは興味深い。

久留米市美術館の「長谷川利行展」（9月22日～11月4日）は、全国5つの公立美術館による共同企画であり、九州では初の本格的な回顧展開催となった。戦前・戦中の東京で放浪生活を送りながら制作した利行の存在は半ば伝説化されている。144点の充実した作品を見ながら、生前にその純粋な姿勢にうたれて支援した人々や没後も大切に作品を守り伝えてきた所蔵者のことを思わずにはいられなかった。北九州市立美術館本館の「没後80年 青柳喜兵衛とその時代」展（9月15日～11月11日）は地元ゆかりの洋画家の足跡を文芸誌の装

丁などを通じた文化人たちとの交流を視野に入れて紹介していた。自筆文献や詩、関連資料を収録した図録は今後の青柳研究の基礎となる内容である。

現代美術では熊本市現代美術館の「魔都の鼓動 上海現代アートシーンのダイナミズム」展（9月22日～11月25日）が近年活発な展開を見せる上海の現代アートの一端を紹介している。中国の現代アートと言えば、20年近く前に読んだ麻生晴一郎氏の『北京芸術村 抵抗と自由の日々』（社会評論社）が印象に残っている。同書は国内で厳しい制約を受ける作家たちのしたたかな活動を浮き彫りにしていた。それが現在の上海では政府や有力企業が現代アートを積極的に支援している。まさに隔世の感があるが、それでもインターネット環境における当局の検閲などは作家の自由な活動と抵触する面があるだろう。そのあたりの作家たちの本音はどうか、本展を見ながら考えてしまった。

最後に、筆者の勤務する鹿児島市立美術館の「明治維新150周年 日本洋画の夜明け—山岡コレクションを中心に」展（9月28日～11月4日）にも触れておきたい。本展は明治初期洋画の山岡コレクションを核とした企画展で、この機会に鹿児島出身の床次正精と曾山幸彦の特別展示コーナーを設け、そのための別冊図録を製作した。この二人については、かねがね何らかの形で紹介したいと思っていたのだが、現存作品が少なく二人を合わせても特別展とするには難しかった。このたび、山岡コレクションに二人の作品が含まれていることを幸いに、全国から作品をお借りして、床次の《三田製紙所全景》（公益財団法人紙の博物館蔵）や曾山の《試鵠》（東京国立博物館蔵）など代表作を含む床次11点、曾山12点の作品を展示することができた。ようやく長年の責を果たせたような安堵感に浸っているところである。



鹿児島市立美術館「明治維新150周年 日本洋画の夜明け」展 会場風景 曾山幸彦の作品

保存研究部会

相澤邦彦（あいざわくにひこ・兵庫県立美術館）

保存研究部会では、基本的に各年2回の会合を部会員の所属館で開催し、そのなかで各館のバックヤードツアー、外部専門家による講演や、テーマを設定したうえで勉強会を行い、また会合以外でもメーリングリストを通じて情報共有や意見交換を行ってきた。

近年では作品借用時に用いることのできるコンディション・レポートの書式について、部会員同士で意見交換をしつつ、外部専門家のアドバイスも盛り込みながら作成に取り組んだ。それ以前にも、保存研究部会を中心として東日本大震災の総合調査や報告書作成に長く携わったこともあり、当面は長期にわたって取り組むテーマを決めず、会合ごとにさまざまな分野から専門家を招き、さまざまな課題について意見交換を行うこととしている。これにより、それぞれ特色の異なる現場に属する部会員やオブザーバーにとって、幅広く、より多くの課題に向き合うことができると考えている。ただしそのなかで、もし継続的に取り組むべき課題として何かテーマを挙げられるようであれば、柔軟に対応する。

今年度1回目の会合は、11月28日（水）、29日（木）の2日間にわたり、金沢21世紀美術館で開催した。まず1日目に、国立文化財機構文化財活用センターの吉田直人氏に「美術館・博物館における照明、温湿度管理」についてご講演いただいた。温湿度変化や照明条件による作品、資料への影響について、科学的根拠をまじえての解説や、紙、木材、フィルム、写真など各素材における影響（変化）の違い、またその前提としてデータロガーや照度計を的確に用いた展示環境や収蔵環境の把握が重要であることなど、幅広くお話いただいた。

また吉田氏は、国立文化財機構内に2018年7月に設立された「文化財活用センター」に勤務されていることから、同センターにおける活動内容や吉田氏の業務についても説明があった。吉田氏が東京

文化財研究所で携わっていた博物館、美術館施設における保存活動に関する助言や共同調査は、文化財活用センターにおいて継続されるとのことである。

情報交換会をはさんで、2日目は金沢21世紀美術館の立松由美子氏の解説により、同館のバックヤードを見学した。展示作業等に必要な資材、機材、照明器具などが整然と管理されていることが印象的で、展示や保存に対して館内の協力体制が構築されていることがうかがえた。

その後、収蔵庫メーカーで全国美術館会議賛助会員である金剛株式会社の吉野滋記氏より、収蔵庫の仕様、建材、庫内環境への工夫について、同社製品のプレゼンテーションにとどまらない詳細かつわかりやすい説明をいただいた。吉野氏の話は吉田氏の講演やバックヤード見学会と連動し、館内環境管理についてより理解を深めることができたと考えている。

次回は2月に会合を実施する予定である。近年保存研究部会新規入会者やオブザーバーを含めた会合参加者も増えていることもあり、引き続き活発な活動ができれば、と思っている。

教育普及研究部会

遊免寛子（ゆめん ひろこ・兵庫県立美術館）

教育普及研究部会は、昨年度「第32回学芸員研修会」の企画運営を担当し、3月19日（月）、20日（火）に国立新美術館で開催した。「社会状況の多様化に美術館はどう向き合うか」をテーマに掲げた本研修会では、①「展示室におけるプライオリティ」、②「キュレーションと鑑賞」、③「言葉は展示を伝えているか」、④「美術を通じた共生」、⑤「美術館と地域がつながる仕組み」、⑥「美術館の社会的役割」の6つの分科会を設け、講師10名と運営メンバー31名を中心にワークショップ形式で行った。事前課題を課すなど負担の大きさを懸念したが、結果的には120名を超える加盟館職員が参加した。

1日目は、6つの分科会に分かれて、各分科会の課題について議論した（第1ラウンド）。2日目の午前、1日目の内容についての中間発表を行い、午後には、関心のある分科会を改めて選び、議論を深め、知見を広めた（第2ラウンド）。すべての美術館職員に共通の課題を厳選したこともあってか、当初目指したとおり、参加者一人ひとりが主体的に関わり、熱心な議論が交わされた。研修の締めくくりとして、国立民族学博物館の吉田憲司館長より「文明の転換点におけるミュージアムの可能性」と題してご講演いただいた。美術館も含めた博物館という大きな視点からこれからのミュージアムのあり方について述べられ、本研修会をまとめあげる上で大変唆に富んだ講演であった。詳細については、今年度末に発行する学芸員研修会



第32回学芸員研修会（国立新美術館）

報告書をお待ちいただきたい。

今年度の活動は、上述の学芸員研修会の報告書編集作業を、有志のコアメンバーに加え、研修会で記録や補助を担当した運営メンバーの協力を得て進めている。また、部会合は、第1回（通算第51回）を11月6日（火）に東京都美術館で開催した。学芸員研修会で得た気づきをもとに、改めてメンバー同士が各所属館で実践している活動事例から学び合うことをねらいとし、10分程度の短いプレゼンテーションの後、参加者からの質疑応答の時間を長めにとる新たな手法を試みた。今回は「各所属館における社会的包括の視点に立った取り組み」をテーマに、幹事から依頼した3名と立候補した部会メンバー2名の計5名がそれぞれ事例発表を行った。多文化共生や社会的包括の考えに基づく事業展開はいずれの館でも喫緊の問題であるらしく、前代未聞の65名という参加者数からも、その関心の高さが伺えた。最後に、国立新美術館の吉澤菜摘研究員より海外視察報告として、アメリカ・サンフランシスコ近代美術館のリニューアルの特徴と、その基盤となったと思われる「ミュージアムにおける学びの主体はどこにあるのか」という問い、それに対する美術館の考え方の変化について情報提供があった。

今年度2回目の部会合については、年度内に学芸員研修会報告書を完成させることを優先課題と捉え、慎重に検討したいと考えている。



第51回会合（東京都美術館）

情報・資料 研究部会

川口雅子（かわぐち まさこ・国立西洋美術館）

本誌 13 号掲載の部会報告以降、情報・資料研究部会は 2018 年 1 月 24 日に第 49 号会合、6 月 13 日に第 50 号会合、7 月 18 日に第 51 号会合、9 月 12 日に第 52 号会合を催した。これらの会合を通じて現在取り組んでいるのは、作家の日記や手紙・記録写真等、美術館に収蔵されることも多いアーカイブ資料の整備とアクセスをめぐる問題である。受け入れた美術館が直面する資料整理の問題もさることながら、そもそもの作家のどのような資料群が廃棄を免れ、どの美術館に収蔵されたかについて総合的な実態を捉える手段がない。大阪中之島美術館準備室の「具体」アーカイブを始め、美術アーカイブ資料の問題がクローズアップされるいま、資料に関するいわば国勢調査を実施し、資料所在を俯瞰的に把握可能にする手段を整えることは意味のあることと言えよう。

国立西洋美術館で開催した第 49 号会合では、本部会が今後アーカイブ資料所在調査をどのように実施していくか、国立新美術館の谷口英理氏から具体的計画案が示された。基本的にはこれまでの本部会の調査手法を踏襲し、全国美術館会議・正会員に協力を呼びかけるアンケート調査を出発点とする予定だが、議論を通じて、今回はアンケート調査の対象範囲について共通認識を持つこと自体、一筋縄ではいかないことが明らかになった。そこから本部会が企画を担当する今年度学芸員研修会（2019 年 3 月実施予定）をアーカイブに関する共通理解の醸成の場とする案がまとまった。

第 50 号会合は見学会を兼ねて近年設立された石橋財団アートリサーチセンターで実施した。同財団ブリヂストン美術館の黒澤美子氏による同館図書活動の歴史および現在の取り組みについての説明の後、図書室のほかバックヤードの諸施設を見学した。このほか前回に引き続きアーカイブ資料調査についての検討を行った。資料の概要記述については「国際標準記録史料記述一般原則：ISAD (G)」を参照しているが、項目選択の妥当性や調査範囲の検討のため、幾つかサンプル・

データを作成し、次回以降議論していくこととなった。

国立西洋美術館で開いた第 51 回、第 52 号会合では、部会員が持ち寄ったデータ 24 件をもとに検討を行い、学芸員研修会の企画も進めた。各館が所蔵する実在の資料群を素材としたことで、項目の妥当性など形式上の問題と共に、埋もれている資料の可視化という趣旨に照らした場合、どこまでを調査範囲に含めるのが妥当か、あるいは資料群の収蔵情報開示にあたり館内調整が何より難関となるのではないかといた計画の根幹に関わる諸問題が浮き彫りになった。

こうしたアーカイブ資料所在調査計画と並行して、今年度後半は、著作権法第 47 条改正を受けて設置されたガイドライン作成の協議・調整に参画し、美術館収蔵品画像の普及・公開の利便性向上に向けて権利者と共に議論を重ねているところである。



第 52 号会合（国立西洋美術館）

小規模館 研究部会

神谷剛生（かみや たけお・刈谷市美術館）

小規模館研究部会では、例年 2 回の会合に加え、毎年テーマを設定する研修会を開催している。今年度 1 回目の「第 47 号会合」は富山県美術館で全国美術館会議・総会の翌日 5 月 18 日に、2 回目の「第 48 号研修会・会合」は刈谷市美術館で 10 月 30 日、31 日に開催した。

今年度の研修会では「美術館の施設改修」をテーマとし、まず部会加盟館を対象に事前アンケートを実施した（回答率約 70%）。多くの館が開館から数十年を経過している現在、施設・設備の老朽化や機能低下の対策は喫緊の課題であり、9 割の館が「改修の必要がある」と回答した。その内容の多くは、空調や照明など、展示・保存に直結する既存設備・機能の延命措置であり、美術館活動の見直しや拡充に繋がる抜本的なリニューアルはほとんど実施できない（できなかった）状況が見受けられた。

研修会の前半では、2 名の外部講師をお招きしてご講義いただいた。まず豊田市美術館館長の村田真宏氏からは、アンケート結果の分析とともに、美術館を取り巻くバブル崩壊後の厳しい状況を振り返りながら、変化する地域社会での役割や逆境に応じた改修の在り方等についてお話しいただき、小規模館の将来像や意義を考えさせられる示唆に富むレクチャーとなった。また、東京文化財研究所保存科学研究センター長の佐野千絵氏からは、「施設設備リノベーションと展示要件」の題目で、耐用年数から判断する改修時期、温湿度環境の改善方法、漏水対策、LED 照明の導入指針等につい



第 47 号会合（富山県美術館）

て、具体例を交えながらお話しいただいた。これらは特にアンケートで回答数が多かった内容でもあり、現場での実践的な知識を得ることができた。研修会の後半は、刈谷市美術館の収蔵庫を含めたバックヤード、建物外壁を実地検証しながら、同館が抱える問題点を確認した。参加者の意見交換は、当日と翌日の会合内でも行われ、各館の改修状況や課題等の情報を共有することができた。会合後には、高浜市やきものの里かわら美術館、碧南市藤井達吉現代美術館を見学し、3 月に開館する刈谷市歴史博物館の新しい設備も視察した。

当部会は、今年度新たに 4 館が入会し、加盟館数 62 館にまで成長したが、一方で、老朽化対策等が実施できず、廃館を余儀なくされる館もある。〈小規模〉を自認する館が集まり、等身大の視点から諸問題を考察し、改善する知恵や情報を分かち合ってきた活動は、今後ますます重要になるだろう。拡張する部会ネットワークを十分に活かし、各館のより豊かな美術館活動の実現に向けて努めていきたい。

なお、今年度 2 回の会合では来年度に当部会が担当する「学芸員研修会」の準備に関して協議した。2018 年 10 月に事務局からの仮募集でもお知らせしたとおり、「大規模災害被災地における学芸員の役割を知る（仮称）」をテーマに、宮城県気仙沼市での開催（12 月 9 日～10 日）を予定している。仮募集の結果（参加希望約 50 名）と開催地の受入限度（会場、宿泊先等）を踏まえて調整し、夏前を目途に正式募集を行いたいと考えている。



第 48 号研修会・会合（刈谷市美術館）

ホームページ 部会

宮武 弘 (みやたけ ひろし・福島県立美術館)

ホームページ部会は、事務局、委託業者との3者で連携しながら全国美術館会議ホームページ(以下「全美ホームページ」)の運営にあたっている。以下、昨年度後半以降の活動についてご報告したい。

まず昨年度下半期の活動としては、同年12月5日に福島県立美術館会議室にて第33回会合を開催している。5月に当初の予定どおり個別ログインシステムを導入し、若干数の未登録館を残しているものの、総じて順調に新システムへの移行が進んでいることから、ここでは改めて全美ホームページ全体の見直しと課題の洗い出しを行った。まずトップページのレイアウトについて、バナーを見やすく整理すること、会員館の外観写真を大サイズデータへの変更を進めることとした。そのほか、全美の組織構成が分かりにくいとの声もあるため、事務局と協議しながら組織図の草案を作成することとなった。また「東日本大震災救援・支援活動サイト」の取り扱いについて、今後更新される可能性が低いことからトップページからのリンクを解除してはどうかとの意見も挙がったが、活動そのものは継続中で

あることから当面、現状のままとすることとした。

続く今年度上半期の活動として、5月18日、富山県美術館会議室において第34回会合を開催した。ここでは主に、前年度からの懸案事項となっている個人会員及び賛助会員の閲覧権限設定のあり方について協議し、以下のような方向性で意見の一致をみた。

1. 個別ログインシステムによって可能になる個人会員や賛助会員が一般ページ以外に見られるサービスについては、有益なコンテンツ追加に向けて引き続き検討していく。
2. 閲覧権限の切り分けについては、ホームページ部会として具体案を提示できるよう準備する。
3. 新システムの機能を活用した双方向型コンテンツ導入を検討する。例えば研究部会向けに意見交換の場として掲示板的なもの、加盟館向けに広報用の書き込みスペースを設置するなど。

いずれも現時点ではまだアイデア段階に過ぎないが、今後の全美ホームページ拡充に向けて、さらなる検討を進めていきたいと考えている。



第33回会合 (福島県立美術館)



第34回会合 (富山県美術館)

機関誌部会

尾崎信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立博物館)

機関誌部会の活動としては、この1年の間に予定どおり『ZENBI』の第13号(2018年1月31日発行)と第14号(2018年9月1日発行)を発行した。このための校正作業を兼ねた編集会議を2017年12月16日と2018年7月28日に開催した。『ZENBI』は現在、全国の11美術館・博物館のミュージアムショップで取り扱っており、昨年度は全体で129部の売り上げがあった。例年は100部程度の売り上げであったから、かなり伸びたといつてよいだろう、これに比して、誌面広告は毎号4社から5社で推移しており、賛助会員各社からのさらなる出稿をお願いしたい。

各地域からの「ブロック報告」と自由な投稿による「全美フォーラム」を二つの柱とした編集方針は創刊以来一貫している。「ブロック報告」については、理事の方から推薦いただいた関係者に順番に依頼している。時に展覧会準備等の理由でお引き受けいただけない場合がある。もちろん無理にお願いすることはないが、執筆者の地域や世代に偏りがないように配慮しての人選であるから、可能であれば所属する美術館の職員、あるいは世代的に近い方を次の候補として推薦いただければありがたいと感じる。「全美

フォーラム」については、今年度もゲストキュレーターやカタログの書籍化、あるいはSNSと美術館、さらに美術館と「近代」といった、『ZENBI』ならではのテーマをめぐるエッセイが寄せられた。執務のうえで何かの参考となれば幸いである。

先般、突如報道された「リーディング・ミュージアム」なる構想に対して、全国美術館会議が声明を発表したことについては運営制度研究部会の部会報告にもあるが、第14号では企画担当幹事からのこの問題に関わる経緯を報告し、周知をはかった。この問題については若干の事実誤認もあったようであり、逆に文化庁からは全国美術館会議に対して文化庁の見解を明らかにする場の設定の要請があったと聞いている。文化庁改組の影響で今号では果たせなかったが、本誌はこのような表明や議論の場も提供したいと考えている。

機関誌部会が再開してから10年、『ZENBI』の創刊から7年が経過した。部員については拡充をはかってきたが、私を含めて高齢化が進みつつあるように感じる。若い学芸員の参加をお待ちしている。オブザーバー参加も歓迎する。



第25回会合 (京都国立近代美術館)

美術館運営制度 研究部会

貝塚 健（かいづか つよし・石橋財団ブリヂストン美術館）

2017年5月の第66回総会で採択された「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」（以下「原則と指針」）の冊子を、12月下旬に刊行することができた。「原則と指針」そのものに加え、日本博物館協会版「博物館の原則；博物館関係者の行動規範」、ICOM職業倫理規程（和英）、博物館法、「博物館の設置及び運営上の望ましい基準」、文化芸術基本法を収載した。筆者はこの資料編を意外と重宝している。

各会員や関係者に送付したのは年明けだった。総計10,000部を制作したのは、全会員館職員に行き渡るようにと配慮したものである。事務局に追加送付の依頼をされた館もいくつかあったが、会員館のみなさまからあまり反響が寄せられていないのは、たいへん残念なことだ。部会の努力が足りない部分があるのは事実だろう。想定できたことだが、博物館学を講じる大学関係者からは好意的に迎えられた。筆者が知る限り、3大学の教員から講義やゼミで「原則と指針」を使いたいとの申し入れがあった。また、他館種の博物館組織から、同様の指針を策定することを検討しているのでもあった。部数を送ってほしいという依頼もあったし、各地の博物館協会の年次大会で配布したいというご依頼も絶えない。ぜひみなさまにはご一読のうえ、さまざまなご意見やご批判をお願いしたいと考えている。

2018年5月19日の読売新聞夕刊に掲載された「リーディング・ミュージアム」をめぐる報道には驚かされた。経緯は『ZENBI』14号にあるとおりである。市場に積極的に関与する枠組みは、われわれの考えている美術館像とは異なるものだ。だが、「われわれの考えている美術館像とは異なる」と言い切れる論拠を、実は一昨年まで全国美術館会議は持っていなかった。6月19日に、全国美術館会議の会長声明を出せたのは、いうまでもなく1年前に採択された「原則と指針」があったからである。「原則と指針」が思ってもみなかったかたちで早々に機能したことに心から安堵し、また長い苦難の末に採択されたことをあらためて喜んだ次第である。

2018年5月の富山での第67回総会以来、われわれは『現場で使える 美術著作権ガイド』再版を進めている。山梨俊夫部会長の記事に詳細は譲るが、著作権法ほど変容が激しく、美術館の現場に直接的に影響を及ぼす法令は少ないだろう。複製技術や通信技術の進化があまりにも激しいからだ。この5月の直近の改正も、電子通信分野での美術作品の画像取り扱い制限の緩和など、美術館活動に大きな変化をもたらす可能性がある。また、TPP11の発効により著作権保護期間が没後70年に延長されることになった。さまざまな権利がもつとも調和する着地点をさぐるこの法律をめぐる、文化庁を中心に英知が注力している。幸いなことに、2011年の初版でご執筆いただいた甲野正道氏（元国立西洋美術館副館長）に、今度も全面的にご尽力いただけることになった。甲野氏はたいへん意欲的である。本稿を執筆している2018年11月初旬現在、まだ編集日程の詳細は詰め切れていないのだが、なんとか2019年3月にはかたちのあるものにして、みなさまの力になりたいと考えている。

また、この部会は再び公立美術館の指定管理者制度の問題に取り組み始めている。この部会の前身の一つが指定管理者制度研究部会であったことを、思い起こしていただきたい。混乱と不安、手探りのなかで始まったこの制度が、「いまはもう落ち着いてしまっていて、それなりに現場はうまく対応している」といった声も聞く。だがほんとうにそう過ぎ去った課題、乗り越えた課題なのかは、慎重に見極めなくてはいけないだろう。部会は指定管理者制度を単に否定するのでも肯定するのでもなく、みなさまがあらためて考え直してみる手がかりを用意することを目論んでいる。だが、作業を始めてぶつかったのは、この制度の実態が、ほんとうに多様過ぎるほど変化に富むことだ。しばしば「……型」と呼ばれる制度導入タイプがあるが、内実を探るとさまざまな差違が見えてくる。手強い課題であるが、それなりの実りある成果を出したいと今は考えている。

地域美術 研究部会

藤崎 綾（ふじさき あや・広島県立美術館）

地域美術研究部会では、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針や目標のもと、今年度も活動を行った。

第8回会合は、5月18日に高岡市美術館で開催。まず富山県水墨美術館の若松基氏による「『とやまの洋画史 入門』以後」と題した発表があった。氏が長く勤務された富山県立近代美術館における地域美術研究の実践例として、特別展「とやまの洋画史 入門編」（2005年）を機に進んだ研究とその後の丹念な調査を踏まえた事例が紹介された。従来、大正期に始まるとされていた富山の洋画史だが、新たに確認できた明治期に遡る活動や、同僚草創期の洋画家・田部英嘉らの作品発見の経緯が紹介され、調査研究の積み重ねが新出作品に結びつく、地域美術研究の幸運な実例としても注目の報告であった。

つづいて、高岡市美術館の瀬尾千秋氏から「高岡市美術館の歩みと地域美術」と題した発表があった。高岡市美術館は、1951年開館という地方美術館の先駆的存在である。企画展を主とする地域美術への取り組みの中でも、とくに版画家・南桂子の顕彰は定期的に行われ、2011年の個展では他館との協働により摺師も交えた原版調査が実現し、発見の多い企画であったことが報告された。ついで、同館の竹内唯氏による「村上炳人について」と題した郷土の彫刻家紹介を聴講、収蔵庫では館長の村上隆氏より解説を受けつつ村上炳人作品を見した。

第9回会合は、11月15日～16日に、和歌山県立近代美術館と兵庫県立美術館で開催。1日目は、和歌山県立近代美術館の奥村一郎氏から「和歌山県立近代美術館のコレクションと石垣栄太郎」と題した発表があった。同館では、郷土の主要作家である石垣栄太郎の顕彰を旧館時代から定期的な実施、長年の研究実績が体系的な収集活動にも結びついている。発表では、石垣や国吉康雄らによる画影会（1922年設立）の活動や邦人美術展など、長年の調査研究を踏

まえて石垣の活動が紹介された。収蔵庫では、近年発見された石垣作品とともに清水登之の『ヨコハマ・ナイト』を実現。調査や記録写真をもとに横浜美術館所蔵の『ヨコハマ・ナイト』との比較分析がなされ、参加者からも活発な意見が出された。また、特別展「創立100周年記念 国画創作協会の全貌」展を藤本真名美氏の、ついで関連企画「特集：国展の版画」を宮本久宣氏の解説を受けつつ鑑賞。コレクションの厚みと研究成果を実感する展示であった。

2日目は、兵庫県立美術館の相良周作氏による発表「兵庫県立美術館のコレクションについて」を聴講。県政100年を機に建設され、震災後の文化復興のシンボルとしての意味合いも担った歴史と収集活動に続き、地域美術への取組例が紹介された。とくに、「レトロ・モダン神戸—中山岩太たちが遺した戦前の神戸」（2010年の「甦る中山岩太—モダニズムの光と影」展と併催）は、戦前の神戸風景を捉えた作品を広く調査した実績を伴うオリジナルの企画として注目された。あわせて、館長補佐の飯尾由貴子氏や相澤邦彦氏から説明を受けつつ、展示作業中のコレクション展会場や修復中の作品についても実見の機会を得て会合を終えた。来年度は、第10回部会を北海道で開催予定である。



第8回会合
（高岡市美術館）



第9回会合
（和歌山県立近代美術館）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

アート印刷株式会社	株式会社集英社
有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」
株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	一般社団法人全国美術商連合会
株式会社アートログ	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク	大日本印刷株式会社
イカリ消毒株式会社	株式会社丹青研究所
イセ文化財団	株式会社 TT トレーディング
株式会社印象社	株式会社 DNP アートコミュニケーションズ
AGC グラスプロダクツ株式会社	株式会社東京美術倶楽部
株式会社 NHK エデュケーションル	凸版印刷株式会社
株式会社 NHK プロモーション	株式会社トップアート鎌倉
M&I アート株式会社	トライベクトル株式会社
影山幸一（アートプランナー・デジタルアーカイブ）	日油株式会社
株式会社加島美術	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
株式会社学研プラス	日本通運株式会社
カトーレック株式会社	ビーブルソフトウェア株式会社
公益財団法人かながわ国際交流財団	株式会社美術出版社
湘南国際村学術研究センター	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社ギャラリーためなが	株式会社伏見工芸
株式会社求龍堂	ホーチキ株式会社
株式会社キュレイターズ	有限会社丸栄堂
協同組合美術商交友会	ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社
株式会社グッドフェローズ	株式会社ユニークポジション
株式会社クレヴィス	読売新聞東京本社
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科	ライトアンドリヒト株式会社
高精細映像活用プロジェクト	株式会社レンブラント
株式会社廣済堂	早稲田システム開発株式会社
金剛株式会社	
JOPD 株式会社	

(50 音順)

事務局から

著作権法改正、リーディング・ミュージアム、大規模災害

事務局企画担当幹事 渋谷 拓（しぶや たく・埼玉県立近代美術館）

『ZENBI』第 14 号「事務局から」でご報告し、また既に会員の皆様の元に届いている報告書に記載されているとおり、第 67 回全国美術館会議総会（以下「総会」）は富山市で 2018 年 5 月 17 日、18 日に開催され、全国美術館会議（以下「全美」）の法人化（一般社団法人化）が承認されました。年来の課題であった法人化の方針が決定したこともあり、第 67 回総会が開催された 2018 年 5 月は、全美の歴史における一つの重要な転換点として、美術館関係者に今後記憶されていくことと思います。

さて、2018 年を振り返ってみると、この 2018 年 5 月という季節は、法人化とはまた別に、全美が関与する大きなトピックが浮上してきた時期でもありました。第 1 のトピックは、総会 2 日目にあたる 5 月 18 日に、第 196 回通常国会において「著作権法の一部を改正する法律」が成立したことです。詳細は文化庁のリリースや報道に譲りたいと思いますが、改正の趣旨は、デジタル・ネットワーク技術が進展した時代における著作物の利活用促進であり、美術館との関係においては「美術館等におけるアーカイブの利活用に係る著作物の利用をより円滑に行えるようにする」ことがまさに目指されています。美術館活動に密接に関わる著作権の問題であることから、成立前から全美としてもそ

の帰趨を注視していたのですが、第 67 回総会において承認された『現場で使える美術著作権ガイド』（2011 年 2 月）の改訂版発行は、この改正著作権法の成立を睨んでのものでした。全美ホームページ活動報告「第 30 回美術館運営制度研究部会会合報告」にあるとおり、改訂版の製作・編集作業は同研究部会によって現在精力的に進められています。また、事務局は情報・資料研究部会とともに、著作権法の改正に伴う運用面でのガイドライン策定（例：美術作品の展示に伴うデジタル画像の利用条件など）に関して権利者、文化庁との意見交換の場に参加しつつ、美術館運営制度研究部会による編集作業に協力しています。

第 2 のトピックとしては、総会の翌日となる 5 月 19 日に、読売新聞夕刊に掲載された記事「アート市場育む『先進美術館』」に始まる、いわゆる「リーディング・ミュージアム」構想が美術館関係者を驚かせたことが挙げられます。政府に「先進美術館」として指定された館が、所蔵作品の価値づけ・売却を通じてアート市場の活性化に寄与する、という内容の報道を受けて、事務局に問い合わせが多数寄せられたこともあり、全美は 6 月 19 日付けで声明「美術館と美術市場との関係について」を発表しています。この声明を作成・発表するにあたっては、長く粘り強い検討の末に第

66 回総会で承認・発行された「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」（以下「原則と行動指針」）が、全美としての見解を示すための重要な拠りどころとなりました。7 月には、正副会長を含む当会議側 4 名と文化庁担当者との面談も行われ、文化庁側からは「美術館の作品売却によって市場を活性化する意図」がない旨の説明を受けています。また、この面談の場にて、今後、美術館の現状や課題などについて、全美と文化庁との意見交換の場を設けられれば、という意向が双方から示されたことを受けて、そうした機会を設定するべく、全美事務局は現在その調整を行っています。リーディング・ミュージアムの件にせよ、著作権法改正の件にせよ、それらはある意味では、美術館という社会の公器が文化振興において果たす役割が、今日改めて注目されてきていることの証左であるとも言えます。芸術文化の振興についてはこれを歓迎しつつも、そこで美術館が果たす役割については、「原則と行動指針」に基づいた美術館のあるべき姿を、世の中にさらに積極的に発信していくことの必要性を感じた出来事でした。

さて、法改正や国の政策に関連したトピックがあった 5 月でしたが、6 月以降についていえば、日本各地で大きな災害が発生したことが記憶に新しいところです。主な災害として、大阪北部地震（6 月 18 日）、西日本豪雨（7 月初旬）、北海道胆振東部地震（9 月 6 日）、台風 21 号・24 号（9 月）が挙げられますが、美術館・博物館等が受けた被害としては、国立民族学博物館の被災や、北海道の館園施設の休園・展覧会会期の変更な

どが報告されています。災害時には通信インフラが被害を受ける場合もあり、事務局としては、災害発生地域の会員館の被災状況を迅速に把握することに改めて難しさを感じた夏となりました。このように頻発する自然災害に対応するために、全美には災害対策委員会が設けられていますが、村田真宏委員長（豊田市美術館長）の呼びかけで、11 月 14 日に「全国美術館会議災害時連絡網」にあるブロック本部館・副本部館会議が東京で開催されました。会議では、各ブロックにおける被災情報の今後の収集体制、各地域・各館での情報収集の取り組み事例などが話題になるとともに、「大災害発生時における対策等に関する要綱」の改正についても意見交換がなされました。村田委員長の「もはや被災していない地域は、日本にはほとんどないのではないか」という危機感に溢れたコメント、また南海トラフ地震の発生に備えた愛知県美術館の取り組み事例などをうかがいながら、事務局としても、また正会員の一学芸員としても、美術館とその連携組織が日頃から災害に備えることの必要性をさらに強く認識することとなりました。「大災害発生時における対策等に関する要綱」、またそれに基づく連絡網実施要領並びに援助活動実施要領については、改正案を 2 月の理事会と 5 月の総会に提出するべく、現在、見直し作業が同委員会により鋭意進められていることをご報告いたします。

編集後記

『ZENBI』の 15 号をお届けする。オリンピックに続いて万国博覧会も日本で開催されることが決まったが、破れかぶれのお祭り騒ぎと日々強まる閉塞感の非対称に強い違和感を覚えるのは私だけだろうか。もはやこの国にそのような余裕があるはずもなかろう。

昨今のさまざまなニュースからも明らかとなり、昭和時代の後期に簇生した美術館という施設は、今や建築と理念、ハードとソフトの両面において大きな曲がり角にさしかかっている。しかし美術館をめぐる話題は関連する事件が起こるたびに興味本位に論じられるばかりで、問題の本質を深く掘り下げるジャーナリズムはほとんど存在しない。機関誌という限界があることは承知しているが、美術館や展覧会に関わる者として、本質的な議論を深めたい。そのために多くの方々からの投稿を期待している。

思えば平成の 30 年間、それは奇しくも私が学芸員としてのキャリアを積んだ時期とほぼ同期しているのであるが、美術館をめぐる環境は冒頭の異様な活気とそれ以後の沈滞に画然と二分される。一方で私たちの社会を反映するかのように、予算やスタッフに恵まれたごく少数の施設と本来の理念とは遠く収益の追求を迫られる多くの「美術館」との格差も広がるばかりだ。平成を襲う時代にあって美術館とそれをめぐる状況はどのような変貌を遂げるのか。本誌を通して引き続き注視したいと考える。

本誌の校正作業を進めているさなかに、本誌第 4 号に関東ブロックのブロック報告を寄せていただいた千葉市美術館の水沼啓和さんの訃報に接した。本誌の執筆者の中で物故されたのは神田日勝記念美術館にお勤めであった菅訓章さん、水戸芸術館現代美術センターにお勤めであった浅井俊裕さんに次いで三人目となる。最後に担当された「1968 年 激動の時代の芸術」を先日私も訪れたばかりだ。水沼さんは長く人工透析を続けられ、闘病の身でありながら、ダン・グレアムやジョゼフ・コッススといった日本においてほかでは紹介されたことのない作家の個展、あるいは倫雅賞を受賞された赤瀬川原平の回顧展など、記憶に残る多くの展覧会を企画された。今回の展覧会も評判を呼び、本号の中でも何人かの方が言及しているとおりである。まさに身を削るようにして準備された展覧会であろう。かくも真摯に学芸員としての仕事に打ち込まれた水沼さんに深い敬意と哀悼の念を捧げ、心から御冥福をお祈りする。 (O)

『ZENBI』では、次の要領で広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

- [原稿の内容] ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
・原稿には表題を付してください。
- [投稿の資格] ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
・匿名の投稿は受けつけません。
- [投稿に係る詳細] ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。
- [締切] ・第16号(2019年7月発行予定)については4月30日、
第17号(2020年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着)
- [提出先] 〈メールの場合〉 s-osaki@pref.tottori.jp (尾崎)、 aoyama@ma7.momak.go.jp (青山)
〈郵送の場合〉 〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町 京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 青山杏子
- [問い合わせ先] 内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会 幹事 尾崎信一郎

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿(写真を含む)は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会(以下「部会」という。)に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻号ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

加島美術 この春の催し

KASHIMA ARTS

バック・トゥ・ザ・ 江戸絵画

2019 **3.21**(祝・木) ▶ **3.31**(日)

伊藤若冲、曾我蕭白、円山應挙、長澤蘆雪、白隠慧鶴、岩佐又兵衛や鈴木其一も! 天才絵師たちによる驚きの江戸絵画の世界へ。



伊藤若冲「布袋図」(部分)

美祭

An Exhibition of
Japanese Paintings and
Japanese Works of Art

BISAI

美術品販売会

「美祭・撰」

2019 **4.20**(土) ▶ **5.6**(月)

30周年を迎えた加島美術の美術品販売会「美祭」が今年から新たな展開へ。撰りすぐりの優品のみ約100点が揃う至高の日本美術の祭典「美祭・撰」をお見逃しなく。

*初めてのお客様にはカタログを無料で進呈します。
下記連絡先までお問い合わせください。

いずれも加島美術にて開催 10:00~18:00(会期中無休)



加島美術

KASHIMA ARTS

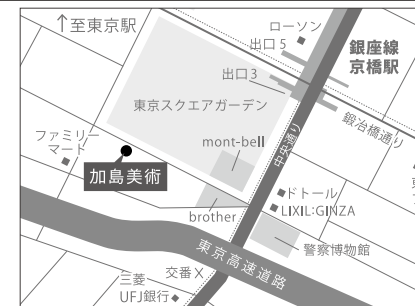
〒104-0031
東京都中央区京橋3-3-2

tel:03-3276-0700

fax:03-3276-0701

mail:info@kashima-arts.co.jp

www.kashima-arts.co.jp



ICTを活用した見学スタイルで 新たな感動価値を

多言語対応・合成音声・ビーコン対応。見学者ご自身のスマホ・タブレットで
音声ガイドを楽しむことができるアプリです。

MUSENAVI

音声ガイドアプリ ミューズナビ

ミューズナビ 🔍

導入実績

岡山県立美術館 音声ガイダンス

佐久市考古遺物展示室

京都伝統産業ふれあい館 音声ガイダンス

鳥取砂丘 砂の美術館「スナビ・ナビ」

トヨタ博物館「ト博音声ガイド」

トヨタ産業技術記念館 音声ガイド

カップヌードルミュージアム 横浜

カップヌードルミュージアム 大阪池田

オタフクソース「Wood Egg お好み焼館」

その他の実績はサイト・資料請求にてご確認ください。

(順不同・敬称略)

岡山：岡山県倉敷市阿知 1-7-2 tel 086-426-5932
東京：東京都千代田区神田神保町 4-3-12 tel 03-5280-9150
大阪：大阪府大阪市都島区片町 2-2-40 tel 06-6242-8090



PEOPLE
SOFTWARE

私たちは感動価値創出企業を目指します
ピープルソフトウェア(株)

お問い合わせ・資料請求はお気軽に



0120-960-228 (通話料金無料)

携帯電話からは 086-426-5932 (通話料金がかかります) 受付時間 9:00～18:00 (平日)

ミューズナビ 🔍 <https://www.musenavi.jp/>